

第4回中間報告

(報告期間2018年3月31日～2018年7月6日)

基本情報

派遣クラブ：広島西ロータリークラブ
カウンセラー：加藤 博基 氏
受入ホストクラブ：Rotary Club of Brighton & Hove Soiree
カウンセラー：Chris Wellings

国際ロータリー第2710地区
2017-2018年度グローバル補助金奨学生
藤原周平

報告書提出日：2018年7月7日

E-mail：shujkl@gmail.com
連絡先電話番号：+44 7754 756 824
教育機関・専攻分野：サセックス大学大学院
国際教育と開発専攻（修士課程）
University of Sussex
MA in International Education and Development

目次

1. 学業面での成果
2. 受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流
3. 直面した課題、問題点等
4. 今後の課題、目標
5. その他特記事項

1. 学業面での成果

春学期の選択科目として、「教育と紛争のグローバルガバナンス」を選択し、教育と紛争の関係についての理解を深めることができました。教育は、近年開発途上国で頻繁に発生している暴力紛争を助長する場合と抑制する場合があります。例えば、パキスタンやアフガニスタンでは、旧ソ連時代及び旧ソ連崩壊後に、初等学校教育において、次のような算数の問題が記載されていたことが確認されています：「3200メートル離れた場所にいるソ連兵の頭を、1秒で800メートル進む銃で狙い撃ち場合、何秒で銃弾が届き命中しますか?」。これは極端な例であるものの、教育内容が、どのように暴力紛争に対する生徒の考え方に悪影響を及ぼすかを示しています。一方、例えばスリランカでは、シンハラ人とタミル人との間の暴力紛争が長年続いていましたが、学校教育でお互いの言語を共に学習するなど、より調和することを目指した教育政策が良い結果を生みだしていることで知られています。このような事例を通して、紛争を経験した様々な国々を通して学び、知識を深めることができました。また、教育が暴力紛争の予防や抑制に効果を発揮するか否かは、様々な要因が絡んでいて、文脈次第ですが、少なくとも暴力を助長しないような教育を提供することはできるという視点から教育政策を再考する取り組みも行われています。なお、開発途上国で国家を揺るがす暴力紛争が起こる原因は、当然ながら、教育だけではなく、政治経済社会的な要素が含まれており非常に複雑ですが、教育の役割という観点で暴力紛争について考えることは、今後のキャリアに大きく役立つと思っており、非常に有意義でした。

前回の報告書で書きましたように、修士論文の内容として、ナイジェリア北部のボコハラムという武装過激派組織に焦点を当て、彼らがなぜ現れたのか、彼らの教育に対する考え・論理はどのようなものか、そして彼らの活動による教育システムへの影響について研究することを決定しました。現在は、上記内容を様々な文献を通して研究し、少しずつ理解を深めています。武装過激派組織の発生は、国内の政治経済社会的な要因が、その組織の発生素地を形成していると文献からは推察されましたが、ナイジェリアのボコハラムの場合も同様で、国内の政治的腐敗、著しい経済格差や失業、基本的な公共社会サービスの欠如などが、特定の地域の人々に激しい怒りを生み出していることが分かりました。現時点では、このような、政治経済社会的な背景に加えて、人々がより過激な宗教的イデオロギーに共感した結果、ナイジェリアのボコハラム発生を説明することができるのではないかと考えています。次回の最終報告書で、より詳しく説明できると思います。

2. 受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

4月28日にロータリーが主催するチャリティイベントのお手伝いを行ってきました。当日は、小学生・中学生を対象にした作文コンクールの表彰式があり、多くの親御さんがいらっしゃいました。その後、親御さん、地元の方々、ロータリー関係者との昼食会があり、楽しいひと時を過ごしました。私は、来場された方へコーヒーや紅茶等の飲み物の用意、会場の飾りつけや昼食の用意・片付け等を手伝いました。このイベントは、ロータリーが行うチャリティ活動のための資金集めが

一つの目的であったようで、多くの資金が寄付されたことに、ロータリー関係者の方々は喜んでいました。私は、このイベントに参加することができて、良かったです。たくさんのロータリー関係者の方々と久しぶりに会話を楽しむことができましたし、地元の方々も沢山来場され、普段の大学での生活とは、全く違った雰囲気を楽しめることができました。良い気分転換になるだけではなく、毎回元気なロータリーの方々から良いエネルギーをいただいているように感じます。

6月10日には、現在お世話になっているロータリークラブで、ドイツ及びポーランドのロータリークラブを招待して、3クラブでの合同会合があり、参加してきました。まず、それぞれのクラブが、どのような活動を行なっているかについて、発表がありました。その後、合唱団による歌の披露を行い、最後に、綺麗な中庭で昼食をいただいて終わりました。私がお世話になっているクラブは、タンザニアのザンジバル島での人々の自立支援プロジェクトについて説明していました。自転車の売買・修理等を含めた様々な事業で生計を立てる現地の活動家と連携しながら、地元の貧しい人々の教育や個人事業支援等を行なっていて、感銘を受けました。昼食会では、帰国前でロータリーの方々とお会いできる最後の機会でもありましたので、出来るだけ多くの方々に挨拶をしてみました。1年間の留学経験での楽しい思い出や困難な経験などを共有し、お世話になった方々から、お別れの言葉を交わしました。



作文コンクール表彰式後



グローバル奨学生3人での写真



お世話になったクリスさんとロットさん



中庭での昼食の様子

3. 直面した課題、問題点等

修士論文の詳細な構成のデザインやそれに必要な文献を集めることが直面している課題です。15000単語という長い論文のため、大きな枠組みで構成を考えることは、あまり難しくはありませんが、その大きな枠組みの中で、どのようなことを詳細に書くかを一つずつ決めて詳細な構成をデザインしていく作業が困難です。様々な文献を読みながら必要な情報を取捨選択していくことにも、多大な時間がかかっています。執筆すると同時に、より詳細な構成を着実に固めることで、よりまとまりのある伝えたいことが明確な論文に仕上がると思っていますので、詳細な構成を意識しながら、進めていくことが大切と感じています。

4. 今後の課題、目標

8月末までに修士論文を執筆することが今後の目標になります。出来るだけ良い内容の論文を書くために、7月末までには、ほぼ書き終え、内容を改善するための時間を確保したいと考えています。7月24日からカメルーンの首都ヤウンデで、インターンが始まりますので、仕事をしながら修士論文を書くことになります。8月末までは、あまり仕事に熱中しすぎずに、良いバランスをとりながら、執筆を進めていければと考えています。

5. その他特記事項

2月下旬から3月中旬までの約3週間行われた教職員労働組合による授業ストライキの影響についてです。前回の報告書内で、ストライキに対する学生側からの抗議として、私のコース内の学生約50名で、ストライキについてどのように感じているかを共有し合い、それらを集約、要約したものを教職員、部門、そして大学に提出することを、生徒委員長の役割として進めているという内容を書きました。結果として、我々学生が感じたことをコースメイトと協力して、集約、要約し、コース内の教職員に提出しました。そして、それに関連して、生徒委員長の役割として4月中旬にコース内の教職員と生徒間で話し合いの場を設けました。多くの学生が感じたことを発言し、教職員もどのように感じたのかを率直に話しました。また、話し合いの結果、授業が行われなかったことや、その間教職員へ学業に関する質問などができなかったことに対する謝意を教職員側が認め、学生が感じていた不満や失望感が少しは和らいだのではないかと思います。最終的に、教職員から春学期の課題の締切期限を10日延ばすという譲歩を引き出すことに成功しました。授業料の返金や授業のリスケジュールなどの議論も行われたものの、これらが実施されることは、コース内の教職員が対応できる問題の枠を超えていて、実現するには非常に難しいようでした。我々学生もこれ以上、ストライキについて抗議するだけの活力が残されておらず、コースを超えて、部門、大学の組織レベルでさらにストライキに関する責任追及を続けていくことを止めました。